

●林力が語る ハンセン病家族訴訟と私

林 力

924年、長崎県生れ

元九州産業大学教授

3歳のとき父が星塚敬愛園に強制隔離された。

小学校・高校教師として同和教育に打ち込む。

1974年、著書の中で父がハンセン病患者だったことを明かした。

九州各地の大学で同和教育の講座を持つ。

著書「解放を問われつづけて」「若き教師たちへ」「人権百話」

「父からの手紙」「父はハンセン病患者だった」他多数

・父がハンセン病だった

・消毒

・一時帰宅

・父を隠す

・部落問題との出会い

福岡市長選挙差別事件 1956（昭和31）年（スーパー）

・父の病を公表

・ハンセン病家族訴訟

・血の通った啓発を

ローマ国際会議 1956（昭和31）年（スーパー）

・家族を語れないこと

・心から納得できる解決を

制作 「ハンセン病市民学会全国交流集会 in 長野」

開催地実行委員会

収録 2020年11月19日

山内きみ江 さん 紹介

1934年、静岡県藤枝市生まれ。9人きょうだいの三女。手足の麻痺が始まったのは、10歳の頃。1957年、国立療養所多磨全生園に入所。同年、入所者の定（さだむ）さんと結婚。

当時、患者同士の結婚は断種が絶対条件だった。夫は、肝硬変を患っていたので、きみ江さんが「手術は私が受ける」というと、「女房の身体を子どもができない体にするなんて、男として面目が立たない。」と定さん。手術を受け、いたいたしい姿で帰って来た夫の姿を思い出すと、今もつらくなる。

2001年、養子を迎える。2005年、全生園近くのマンションに転居し、6年半の間、療養所の外での生活にチャレンジ。

2001年の国賠訴訟の判決後、きみ江さんは「人生を終える前に全生園の外に出たい」と思うようになる。その頃、定さんは、病状がとても悪かったが、「おまえにほれたのは、おまえの強い根性だ。これから社会にでようというお前のその根性にほれてるんだ。」と、きみ江さんの背中を押した。

2010年、孫誕生。2011年、定さん逝去。同年、全生園に戻る。

「夫がいなければ、生きてこれなかった。自分の分身のように愛おしい。持病が悪化して一番必要としているときに、私を園の外に出してくれた。女房といえども自分だけのものではない。人間として生きて行ってほしいと言ってくれたときは、本当にうれしかった。」

2012年、全生園の敷地内にできた花さき保育園の開園式に出席し、園児との日々の交流が始まる。

きみ江さんの五行詩

萎（な）えし手に／握手した／可愛い手／大きい幸せを／つかんで欲しい
子どもたちの幸せを思うきみ江さんである。

※ 『きみ江さん ハンセン病を生きて』（片野田 斉著 偕成社）は、第44回千葉県読書コンクールの課題図書。

※ 小学校5年道徳教科書（光村図書）「公正・公平な社会をめぐって だれもが幸せになれる社会を」には、山内きみ江さんの話が掲載されています。

金 貴粉 (Kim Kibun) さん

北海道函館市生まれ。

現在、国立ハンセン病資料館主任学芸員、大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員研究員、津田塾大学非常勤講師。

在日朝鮮人ハンセン病回復者の歴史、朝鮮書芸史を主な研究テーマとして活動している。

大学生の頃、授業で訪れたハンセン病療養所多磨全生園で、案内をしてくれたのが在日の入所者だった。1960年代には700人を超える在日の人々が全国の療養所で生活している実態を知り、「同じ在日でありながらこの方々を見落とししてしまっていたことに気づかされ、自分の無知が恥ずかしく、申し訳なかった。」

全国の療養所にいる在日入所者は高齢化が進み、隔離の実態を語れる人は少なくなった。金さんら学芸員はその役割を受け継ごうと出張講演に力を入れてきた。心がけているのは、隔離政策が続いてしまった要因の一つに、社会の無関心があったことを知ってもらうこと。

『在日朝鮮人とハンセン病』（金 貴粉著 クレイン）

在日三世の著者が、各地の療養所を訪問し、聞き書きと、園や団体で発行されている機関紙等を読み解き、「朝鮮人入所者は病との闘いだけでなく、日本の誤ったハンセン病政策に対する闘い、ハンセン病患者への差別・偏見との闘い、そして、朝鮮人であるがゆえの日本人社会との闘いを強いられてきた」ことを丁寧にまとめている。

また、国策の被害者の側面だけでなく、舌先で点字を読む「舌読」に取り組む男性、肉親を失った悲しみの中で陶芸に取り組む女性の姿等、不自由な生活の中でも、文化や生きがいを追い求めた個人の姿を明らかにしようとしている。

「隔離政策の誤りは、患者を人として見ずに顔の見えない集団として扱ったことが根底にある。名前のある一人一人が生きてきた背景を知ってほしい。」